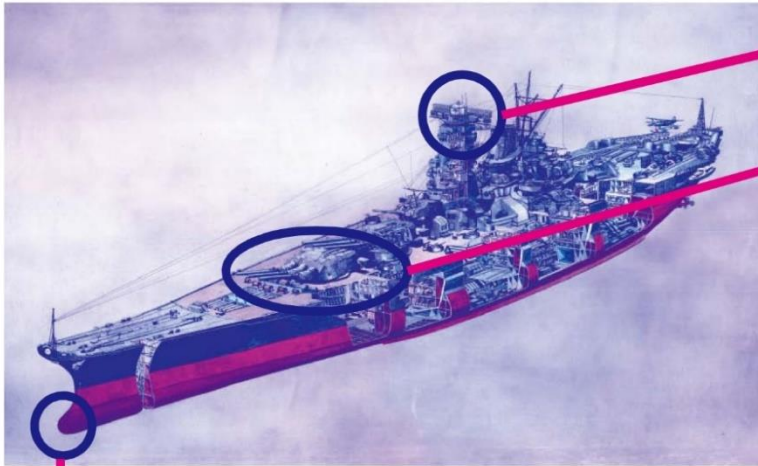


戦艦大和の歴史

3. 「大和」の技術

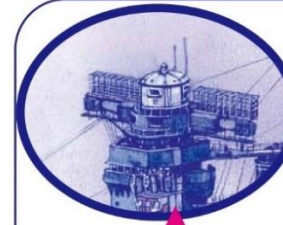
「大和」は、アメリカの『量』に対し、日本が①で対抗しようとした戦艦であり、当時の最新技術の結晶と言えるものでした。その技術は戦後日本の復興と高度成長を支え、現代にも受け継がれています。



球状艦首 (バルバスバウ)

艦首の水線下に球状の突起をつけることで、速力27ノット(時速約②キロメートル)で波がつくる抵抗を約8パーセント減らすことができました。現在も世界の大型タンカーから漁船に至るまで幅広く利用されています。

戦艦大和の歴史



測距儀

③ 目標までの距離を測る機器で、メートルという世界一の大きさを持っていました。こうした技術は、戦後、カメラなどの精密光学機器に大きな影響をあたえ、日本の精密光学機器産業界を世界有数のものに育て上げました。

46センチ砲

「大和」は、世界最大の主砲を搭載していました。この大砲から発射する④ 弾の大きさは、直径④センチ・重さ約⑤トンあり、約42キロメートル先まで飛ばすことができました。この大砲を製造した設備は、現在原子炉の圧力容器の漏れを調査する水圧実験に利用されています。

弱電技術

「大和」は士官室と一部の兵員室に冷暖房が使用されたため、夏でも27度くらいに室温が保たれ、⑥ ⑦ も非常に巨大なもので、乗組員約3,000人が、1ヶ月港を離れていても十分食べられる量の食糧を積んでいました。こうした技術は、戦後、弱電(家電)技術の基盤となっています。

「大和」が
残した技術
はまだまだ
あるんじゃ
よ!

